



### 【解説】

武家の下男を「奴」と云うが、その身纏いは、三味線の撥の形に剃り込んだ撥髪という髪型、農具の鎌のような形に生やした髭、裾の短い上着、つまり半被が特徴である。その半被の模様には大きな四角い「釘抜き紋」が多く用いられたことから、冷たい四角い豆腐のことを今でも「冷や奴」と云う。

何人もの奴は主人の行列に槍、長柄、挟箱などを持ち、揃いの半被を着て供先を勤めたから、「供揃え」であり、男だてのカッコ良さがあつたのである。今も物事の途中を短く省略することをハシヨルと言うが、半被の下の端を高い位置まで折って、まくり上げて着るので、「高端折り」である。そうなると、男性版のミニスカだろうから、女性からすればムキムキの太ももはセクシーであつたのかも知れぬ。

「雪の七降る」とある「セ」は、「あのね」とか「くのよ」などに似た囃し言葉である。地方で色々言い方はあるが、筆者の郷里では「くさ」とか「さい」があり、「雪のくさ、降る夜もさい」と言う類いである。江戸では「雪がね、降る夜も」と云う辺りか。

「姐さん」とは、いい女、オネイチャンのことである。酒場の女、妓女や誰かのお妾さんを匂わす呼称と思つてよい。

歌詞の二番はその女性とのやりとりである。では、旦那と言われている奴さんの主人は、寒い、雪の降る夜も、風の吹く夜も、

一体どこに行っているのだろうか。

諸兄のお察しの通り、遊廓か馴染みの女がいる酒店であろう。コロナの現代では「夜の店」と言われる類いで、昔も今も変わりはない。だから、奴さんは可愛そうに寒空に旦那を迎えに行かねばならないのか、という同情が歌詞の一番である。

ところが、である。大体、かけ声が「コリヤコリヤ」なので、ちよつといい加減な雰囲気ですよね。当の奴さんも宜しくやっていたという話である。

「姐さん、本当？」

朝が来たら、何も言わずに明日の夜も待つてるわって言うし」

アバンチュールを過ごす二人は、互いの衣を掛けて寝る「衣々」が慣わしようです。それを洒落て「後朝」と書く。

「家の裏手の出入り口には私一人しか居ないので、ちゃんと合図をしてね」

「上手く都合を付けて会いに来たよ」

と言っているのだが、どちらが男か、女かのセリフはどうにでも取れるのが、座興で唄う端唄の良さである。

この歌は花柳界のお座敷歌では、三味線方、唄方、立方（舞方）が酒宴の途中で催される。手拍子調の軽快な演奏と踊であるから、男と女の立場が入れ替わっても構わない。

男が忍んで来たので、木戸を開けるタイミングの合図を送れと

女に言っているのか、女が旦那の目を盗んで裏木戸を開けに行くので、ちゃんと合図をしてねと男に言っているのか、どちらでも取れるようになっていいる。まあ、たわいもない酔っ払いのゲームのようなものである。

歌詞の三番以降は、色々な替え歌がある。江戸吉原の遊廓へは隅田川を猪牙舟という先の尖った早舟の水上タクシーで行く。船頭から、

「お客さん、どちらまで行きなさんすか」

と小舟の用意をしているのであろう。

「今夜は冷えるねえ」

というような会話があつて、

「旦那さん、お馴染みさんですね。お心付けの銭をはずんで下さったので、合羽と熱燗をちよつと用意しましたよ。お身の周りの準備は揃いましたので、そろそろ出掛けましょうか。いやあ、お遊びの町へ猪牙舟で行くって、羨ましいことすなあ。

さあ、どこでもお指図のお茶屋近くに舟を遣ますよ」

という会話でしょうね。

最後の替え歌は「花魁三分二朱」と言つて、高級娼婦「花魁」の揚げ代が三分二朱かかる、という揶揄の歌である。ざつと九万円

弱のテーブルチャージである。確かに馬鹿らしい。

「奴さん」もそうであるが、この替え歌も「願人坊主」と呼ばれる門付けの大道芸人によって歌われ、流行つた唄である。エセ坊主は、揚げ代や花魁の素性を聞かせた客に、

「あんた、疑り深いねえ」

と言つて、木戸銭をせがんでいる様である。曰く、

「花魁に情夫が居るのはね、金を貢いでくれる好きでもない旦那に身を任せてお務めを果たし、その憂さを晴らす為にいるのさ」と言う。

「だから、花魁の心の内は、今世も来世も、その先もお前さんだけよ、好きなのは、ということさ」

と、聞いてきたような話しをするのである。どうみても三分二朱の大金を払える筈もない願人坊主の話は、大方の往来人には「ホントかよ」ということになる。長唄 小鍛冶にも出てくる

「金叩き」というエセ坊主の類いでもある。

今も昔も大道芸人の「語り」が面白いので投げ銭を放るのである。「奴さん」も「花魁三分二朱」も人情話ではないので、手拍子が出る流行歌である。諸兄は、一度、新橋にでもお出ましあれ。

令和三年十二月二十五日

大中臣正比呂 記

